

に帰り、通訳を通じて全員を集め、「バプストアグループはラポート、オーチンハラシヨ」「他のグループは昨夜のアジも口先だけで、口先ばかりの民主主義だ」と言った。それから本隊の彼らも昔に戻り、優しさも増してきて、最後の約一カ月ほどではあったが、またナホトカ（最後の集結地）に着いた。

そしてナホトカで一週間船を待ち、やっと船が入港し、今度こそほんとうに日本に帰れるなと思いました。一人ずつ名前を呼ばれ船に乗り込んだときの嬉しさ、途中船内も静かで何事もなく、昭和二十三年十一月十八日、本年最後の船（朝風丸）で。世話役の方々、看護婦さんたちが出迎えてくださり、シベリアの三年余りの苦勞をねぎらってくださいましたこと、今も忘れられません。

【執筆者の紹介】

角野さんは、大正十二年北海道幌加内の農家の次男として生まれ、学校卒業後国鉄勤務。

昭和十六年長男応召のため退職。実家の農業に従事。

昭和十九年三月北部第三部隊に入隊。

昭和二十年九月入ソ、抑留生活、昭和二十三年復員。

その後、農業経営二十年を経て、昭和四十四年岐阜市へ移住される。

会社定年後、実弟の会社の取締役として現在に至る。本年の財団シベリア慰霊訪問に兄弟二人で参加され、御苦勞をかけました。

現在、全抑協岐阜県連の役員として活動していただいている貴重な人材です。

（岐阜県 鈴木 善三）

シベリア抑留

静岡県 室伏 貫二

私は大正十四年三月、静岡県駿東郡小山町生土にて室伏家の次男として生まれ、昭和六年、小山町成美尋常高等小学校を卒業した。兄は、昭和二十年五月三十日、行年二十六歳で支那廣西省にて戦死した。

昭和十九年、十九歳のとき、一年繰り上げての徴兵検査、昭和二十年二月六日に愛知県東部の部隊に集結、二月十五日ころ満州へ出発。佐世保港より朝鮮の釜山に上陸し、軍用列車にて満州へ向かった。列車が進むにつれ寒さが厳しくなり何日か列車内で過ごした後、夕方近く黒河省孫呉駅に着き、輸送用トラックに乗り継いで目的地に向かった。

零下三〇度の厳しい寒さと長旅で疲労も激しく、翌朝部隊に到着すると、当日は兵舎にて睡眠をとった。兵舎はレンガ造りでランプ生活、周囲は小高い丘になっている。夜になると、狼の遠吠えが聞こえてくる。

第二六九連隊奇克（チカトウ）村上部隊歩兵中村隊に配属され、初年兵教育が始まった。雪中行軍、実弾射撃、陣地構築など毎日厳しい訓練であった。三カ月間の教育も無事終わり、私はラップ手教育のため今度は孫呉の部隊本部に異動を命令された。そこでのラップ教育は、戦車壕掘り陣地構築などの合間に行われた。昭和二十年八月に入ると戦雲はいよいよ急を告げソ連と戦闘状態となり、奇克へ戻る途中、ウジヤボ基地

にて村上部隊中村隊の指揮下に入り、昭和二十年八月九日ころ、最前線にてソ連軍との戦闘が始まった。四方は包囲され、敵味方入り乱れての激戦であった。

夜の明けるのを待ち、敵陣を突破し孫呉方面へ向かう。途中の集落はすでに焼け落ち、孫呉にて残留部隊と合流した。その後、応戦態勢の立て直しのため南下、屋は山中に眠り、夜は強行軍。通過する集落はどれも激戦の後で、主な道路や集落はソ連軍に占領されていて、私たち三浦小隊長以下十五名ほどは山越えにて南下を続け、小銃、弾薬を身につけた完全武装で歩き続けた。途中、大きな川を渡ったが、向こう岸にいた日本人たちが驚いた様子で待っていた。近くに日本人官舎があり、戦争の終結すなわち日本の無条件降伏を初めて知った。

昭和二十年八月二十六日武装解除、ソ連軍に強制連行され北安飛行場の格納庫に着く。各部隊から統々と集められ千名で一個大隊がつくられた。今からシベリアに行きウラジオストクから日本に帰るということであった。北安から黒河までは徒歩での行軍で、大隊

千名で長い列をつくり、ソ連軍監視兵の怒号に従い毎日歩き続けた。途中、逃亡者があり、ソ連軍監視兵に捕まり射殺された。

満州国黒河省黒河を経てソ連領ブラゴエシチェンスクに入った貨物列車は、シベリア鉄道を走り続けた。だれもが不安であり、再び日本の土は踏めないというそんな噂が流れていた。貨物列車はイズベストコーワヤに着き、そこで降ろされた。近くに古い建物でロシアの囚人が使用していた収容所があり、ここで作業を行うと言われた。私たちの日本帰国の夢は完全に破れ、再び日本の土は踏めないという噂が現実のものとなった。この収容所は四方を高い塙が囲み、昼夜、監視兵が見張っている。

強制抑留生活が始まった。作業は、森林地帯に入っ
ての木材の伐採作業で、だんだんと奥へと進んでいく。
そのころよりノルマ制が実施され、毎日、重労働を強
いられた。零下三〇度から四〇度の寒さと厳しい疲労。
食事は一日に黒パン三百グラムと粟又はコーリヤン、
大豆などの雑穀類で、量がわずかなため空腹と過労に

より次々と仲間たちが倒れていった。

ついに、私も栄養失調と過労で倒れた。やせ細り、
高熱が続き、ソ連軍監視兵に連れられ病院へ行く。途
中、二度ほど倒れ監視兵の肩をかりて歩く。「ダワイ
ダワイ」という。歩く気力もなくなったが、今度こ
こで倒れたら死んでしまうと頑張り続けた。目が覚め、
気がついたら病院の寝台の上であった。

ソ連の軍医と日本の軍医がいた。食事をする気力が
ない。ただ眠っていた。少し元気な患者が隣の面倒
を見る。今朝も、目が覚めたら、隣に眠っていた患者
がまた死んでいる。人間の死とは、こんな簡単なこと
なのだろうか。私は診察室に呼ばれ、ソ連の軍医と日
本の軍医が聴診器を当てて診てくれた。わずかずつだ
が回復に向かい、粥とスープが食べられるようになった。
五カ月間の闘病生活が終わると、再び私はイズベ
ストコーワヤに戻り、今度は十二、三キロ南に連れて
いかれた。ここは広大な集団農場コロホーズで山の中
ほどに幕舎が並んでいた。

この農場で新しい仲間たちと農作業を行う。大根、

人參、馬鈴薯などの草取り作業である。近くにソ連囚人の建物があり一緒に毎日作業を行った。シベリアの空に秋が訪れ始めるころ馬鈴薯の収穫も始まり、毎日毎日掘り続けた。シベリアの秋は短く寒気が急速に増し、収穫が終わるころにはまた移動させられた。今度は十四、五キロ西に向かって歩かされると次の収容所に着いた。そこは抑留者五百名ほどの作業大隊で、ここでも収容所のラーゲルと呼ぶ檻の中での生活だった。ソ連軍医の身体検査があり、一級者と二級者は重労働に、三級者は軽作業に回される。私は三級者で収容所内の入浴場に回された。入浴場は蒸し風呂になっている。月曜から金曜までは五百名の日本兵の入浴、土曜日はソ連監視兵、収容所長、衛兵所の各将校、現場監督やその他の家族である。

一日の作業は、午前七時起床、浴場内の清掃を行い、八時に少量の雑穀類の朝食、そして前日の入浴者百人の襦袢と袴下百枚を洗濯する。午後一時から六時までの入浴場作業は二名で当たった。他の者は午後から水汲みで、冬は厚い水を割ってバケツでくみ上げ馬車

で運び、薪は近くの伐採跡から運ぶ。午後五時、作業隊が戻り入浴が始まる。

このころになると、共產主義教育が始まった。赤旗の歌が合唱され、難しいことなどわからないが、戦争に駆り出され何万もの同胞が死んでいったこの悲惨さを思わざるを得ない。

昭和二十三年春ころに帰還の噂が流れ、この収容所からも一次の帰還者が祖国日本に向かった。酷寒のシベリアに最後まで耐え続け、昭和二十四年、待ちに待った帰国列車に乗りナホトカに着き、日本から迎えに来ていた「信洋丸」に乗船し舞鶴港に帰ることができた。戦後五十年も過ぎ、今なおシベリアの荒野に眠る同胞の冥福を心から祈りながら、私の抑留の一部を思い出すまづりました。